

地理學の性質について

文學士 小野 鐵 二

地理學が如何なるものをその對象とし、如何なる方法を以てこの對象を取扱ふか、また斯る取扱によつて如何なる職能を果さうとするものであるか、此等の問題については從來論議されたことも

多く、従つてその論議の傾向としても各種のものが現はれた。それ故現在ではもはや論ずべく剩さるゝところ殆どこれなきが如くでもある。併しなから之は外國に於ける狀況であつて、我國に於ては必ずしも斯くの如くでない。最近に於ては、小川博士、小牧學士が『地球』に載せられた論文、『地理學評論』に見はるゝ諸家の論說、批評、或は『人文地理』創刊號の卷頭論文として掲げられ

た大内學士の所説など、何れも夫々に有益であり啓發さるゝ所少なからざるものであるが、尙ほ地理學方法論或は構成論に關する若干の愚考を述べることが許されてもよからうかと思はれる。

地理學の原語たる *geographia* は『地を描く』の義である。古典古代からのち、地を描く知識としての地理學は常に存在した、斯る知識の集まりが古來存在してゐたといふことは、地理學が人の自然の要求によつて存立すべき必然性を有してゐたといふことゝ同義である。即ち人は先づ己れの住居せる周圍に、如何なる山があり川があるかを知り何れの方角に海があり、またこれとは異なる性質を有する湖や沼があるかを見る。これが最も簡單

な『地理學』の一例である。次いで山の彼方、川の彼岸、さては海の彼方が如何なる土地であるか、問題となる。例へば諸ろの種族の間に傳承さるゝ宇宙論乃至地誌は、或は彼等の想像により或は實見によつて、(併しながら常に自己住地を中心とせる土地に關する現象の知識を基礎として)、或る才人又は數代の人々によつて組み立てられたものである。彼等が地誌的傳承を誦し、或は岩壁、木板に粗末な一種の地圖を描き、又は木枝や石塊を列べたり繋いだりして心覺えの圖形を作るが如きは、何れも一種の地理學である、何となればこれらすべての仕事は、表現の手段を言語によると一種の繪畫によるとの相違はあるにしても、結局地を描くものに相違ないから。勿論之を以て、既に茲に地理學在りと言ふは甚しい早計であるが、地又は地表が如何なるものなるや、如何に見ゆるやといふことが、夙くから人の注意を惹き、従つて

之について素朴なる知識が存し、此等の知識が次に多方面に互れるは明らかである。

地を描くことは斯くの如くにして續けられた。

プトレマイオスがその偉大なる才能を以て數學的又は天文學的の知識を進めしによつて、地を描く術もその影響を蒙らざるを得なかつた。文字通り地を描く術、即ち地圖の描出は彼によつて從來よりも容易且つ正確となり、言葉によつて地を描くことも同様に一層精密になり得た。更にプトレマイオスの影響は甚だ顯著であつて、元來天文學者たる彼れを一派の地理學の開祖として見ることも出来る。換言すれば所謂數理地學或は天文地理學なるものは、彼によつて創められたとせぬまでも彼を最初の最も有力な學者とするのが通例である。本來地を描く地理學が茲に於てその性質を變じたのではなく、寧ろ本來の性質に従つて自己を進歩せしむる手段を得たのであるが、手段や方法の重

要なるに注意を奪はれいはい々眩目するならば、地理學は即ち天文學なるかの如く思はれ易い。少くとも天文學の知識が直ちに地理學に屬するが如く考へられやすい。併しながら地を描くことは、諸天や星を描くと同様の獨立性を有する仕事である。

特に今日の如く取扱ふべき素材多くして人の能力に限ある時、その一を以て他の一つをも蔽ひ得ないことは多く疑ない。プトレマイオスの『地理學』は一例に過ぎない。その後數多くの『地理學』が發生したことは地理學史に明らかな事實である。而もそれらの『地理學』のすべてが今日まで生き残つてはゐない。生き残つてゐるのは地を描くところの最も古い地理學である。このものは他の傾向を有する『地理學』が或は現はれ或は消えた裡にあつて、たとひ一見しては極めて顯はな形をとらぬにせよ、常に確固としてその地歩を失はなかつた。特に近代自然科學の目ざましい發達は、一面に於

て物理的存在たる地を取扱ふ斯學に必然に甚深の影響を及ぼし、勢の及ぶ所、地球を一箇の物質として此を物理學的に取扱ふが地理學なりといふが如き傾向をも生ずるに至つた。而も之によつて地を描く地理學が消滅したのではない。例へば世界全體に通用する地理學、詳言すれば斯る地理學の原理——この地理學なるものがまた學者によつて同一ではないが——を打ち立てようとする一般地理學を設けるにも、所謂特殊地理學即ち地方誌が必要であつた。單に必要なのみならず地方誌存立の必然性がこの場合にも強く現はれたと做し得よう。斯くて現在に於ても、地理學は本質的に地を描く學問であると考へられる或は爾かあるべきが正當と信じたい。歴史的に地理學が斯る性質を有し來り、之を本然の姿としてゐたことについては、時代を追ひ諸學者についてその然る所以を明らかにすべきであるが、今は地理學史上の説明を

目的としないのであるから、只だ右の如く地理學の由緒について考へるといふに止めておく。

然らば次に、地理學が地を描く科學として如何なる性質を有するかを見ねばならぬ。この判別は一面に於て多くの學のうちにあつて地理學が何の故に地理學として存立するかの理由づけであり、また他面には內的に、地理學が如何にして構成せられるかの體系論に屬する。

二

屢述せる如く、地表の一片を採り來つて此を描き出すのが、地理學の重心の存するところであり従つて先づこの事に於て地理學は自己職能の本質的部分を見出す。何れの學に於ても職能の存せざるはない。而して如何なる職能を帯びてゐるか、先づ甲乙丙丁夫々の學を區別する。換言すれば甲なる職能を果さんとして甲なる學あり、また乙なる職能を果すところの乙なる學がある。自然の一

片を採り來つて此を記述説明する學は數多いことである、が、自然のうち特に地表の一片を拉し來つて此を如實に描き出し且つ説明しようとする學は地理學の外にない。それは恰かも天體や、岩石や礦物、動物や植物を、斯く在りと或る意味で再現する學としては、星學、礦物學、動物學、植物學の他に何もないと同じである。

併しながら實は地理學の職能が定まる前に、地理學は何物を取扱ふか、即ち如何なるものを素材として採り、此に加工して地理學構造の材料とするか、決定してをらねばならぬ。茲に地理學の對象が何であるかを解いておく必要がある。更に斯く々々の事象を對象とし斯く々々の目標をおきこの對象を取扱ふ、即ち斯く々々の如きを職能とするといふに就ては、そこに取扱の方法、基準がなければならぬ。茲にまた地理學の方法に關する議論が生ずる。

斯くて地理學の對象、方法、職能を明確にすることが即ち地理學の性質を明らかにする所以に外ならない。地理學は地表を描き出すものなりといふが如き定義は、結局甚だ素朴單純であつて、決して明確なりと稱し得ない。されば次に先づ主として地理學の對象について述べ、次で地理學の職能、方法に及ぶべきである。

三

地理學の對象は地表である。而もその限られた特定の部分ではなく、全體の地表が對象となる。地表とは言ふまでもなく大氣と陸地と海洋とが相接する一層精密に言へばその上下若干の擴がりをも含む、部分であり、また人類の住する地球の表面である。物理的には人類の存否とは無關係に褶曲が行はれ、堆積が續き、火山が活動するなど不斷の變化がある所であるが、現在人類生活の行はれる『舞臺』として、また重要な場所でもある。從

つて地表とは、例へば數學に於ける、球の表面として想定されるやうな、圓滑にして厚みなき曲面ではない。少くとも斯る意味の地表は、本然に地理學の對象たるべきでない。一定の長さ、幅、厚さを有し、種々の物質からなる具象的地表が即ち地理學にいふ地表である。夫々の部分が一定の地形を賦與せられ、特定の植物被がこれを蔽ひ、更に人が住居し活動するによつて様々の現象―聚落、道路、運河、鐵道、耕地、果樹園、造林―を作り出す、斯様な具象的な、プラスチックな地の表面こそ、一般に地理學が取扱ふべき對象である。斯くて地理學の特質の一つは、それが己れの對象として、いはゞ裸の地表そのものを取扱はない―地形學はむしろ斯る地表についてその生成過程を究めようとする點に存する。

而して地理學が、或る意味に於て再現しようとする地表は、如何なる時に於ける地表であるか。

之については種々の説を設け得る、併し結局は、歴史が時について社會の事象を序列説明するものであり、地理學が地表の事象を場所によつて配列説明するものであるといふ職能上の原則を忘れることは出来ないと考へられる。それ故、歴史的方法、地理學的方法是夫々歴史及び地理學の専有するところではなく、元來地理學がその職能を果すに當つて倚賴するところの素材取扱方法が必ずしも一であり得ぬにせよ、地理學を地理學たらしめる方法は地理學的方法に外ならない。また實際に當つて重要なのは、時代によつて地表の變化して行つた状態を復原するだけの素材が残されてゐるかどうかといふ點である。即ちこの素材が充分でないならば、如何なる方法と雖もこれを用ひることは出来ない。地形、遺跡、遺物、古文書、諸種の傳承などを消化して、或る地方の地表が古來變遷し來つた跡を示さうにも、それらの素材の源が相

當に豊かでなければ、多くの事實を秩序よく配列するといふが如きは到底不可能である。勿論僅かの素材が、これに加へられたフアンタジの豊富自由なるため、誠に美事な知識に化せられることは、當に考へ得るだけでなく實際に遭遇する事實ではある。併し左様の場合には、そのフアンタジの奔放さ鋭さが特に重視さるべきで、一般に僅かの素材でも有效な結果を築き上げると考へられてはならない。幸にして素材が地理學的方法及び歴史的方法を適當に施し得るだけ多く存在し、從つて古來の地表の變遷が明らかにされるとする。この場合には、やはり地表を對象とする以上、地理學的研究が行はれてゐるのである。またその研究は、その地表といふ一つの事象が變化してゆく體様を、時をよりどころにして再現しようとするものである以上、一つの歴史であるとも言ひ得る。之を他面から見れば、斯る事象は、これを取扱ふ

學問として體系ある獨立的のものをまだ有しないのである。斯る知識の領域は恰も地理學と歴史との境に跨つてゐる。すべて學の境界は必ずしも國境のやうに甚だ劃然たるものばかりではない。二つの學の間に、いはゞ境界帶地を成す部分は、そこを取扱ふ新らしい學が創められることによつて深く開拓される。右に擧げ來れる如き領域も亦た次第に特別な學の活動範圍に屬することゝなるのでもあらう。要するに、地理學が何時の時代の地表を取扱ふやの間に對しては、第一次的には現在の地表をと答ふべきであらう。よつてかのバレオジオオグラフィの如きは、茲に謂ふ地理學のうちへ直ちには入り込みにくい。更に現在といふ言葉もかなり明確ならぬ言葉である。もしこれを狭く解するならば、能ふ限り『過去』を擴大して考へねばならないし、またこれを廣く解釋するならばこれに對する『過去』は縮めなければならない。

の二つの解釋の何れを採るかによつて、先史地理學、歴史地理學（大體前述の如き、地表の變遷を取扱ふ、もしくは或る時代の地表が如何なる状態なりしやを究むる學なりとして）が當然に地理學の一部なりや否やが差當り形式的には決定されよう。例へば地表のうち特に人類の經驗せるそれを重んじ、且つ地球の時代區分についても人類の出現を劃期的事象とする立場から、廣くそれ以後を現在と考へるならば、此等二つの知識體系が地理學の一部を成すことは明白な當然であることされよう。斯様な境界地帶を開拓しようとする試みにはその領域が何れの側からも閉却される危険があることを思へば、尤も歡迎すべきものである。その開拓が諸種の事情から多少の缺陷を有するとしても、それはすべて同様の場合に免がれ得ぬことで何等その無價値不用を證するものでない。幼弱なものも年を假せば強健な壯丁となる。この意味に

於て、常に先史地理學、歴史地理學のみならず、更に他の種々な地理學、領域邊疆の研究は益々進められねばならぬ。元來現在の生ける地表を如實に描き出さうとする地理學者が、自から進んで斯る邊疆の探險に従事することは、延て地理學の本流を常に清新潑濶たらしめることにならう。従つてそれらの研究が地理學を組立てまた充實する上に有益なるか否か、地理學徒の心すべき點である。日常よく見られる例を引くならば、恰かも自轉車兩輪の轍の迹が、或時は相當に離れるが併し決してそのまゝ別れ去らず、常に相近く接してゐるやうでなければならぬ。地理學構成の理論が教へる道筋から地理學的研究が遠く離れることは許されない。斯る道筋はいはゞ地理學の理想であり信仰であるから、研究上すべての行動がこれに則ることになるのである。尙ほ次に地理學の對象に關する考察のクラシカルなもの二三を舉げてお

かう。

四

先づ近代地理學の祖と推さるゝカール・リツテルにとつては、地理學とは諸ろの地方について夫々の dingliche Erfüllung—如何なる物により如何様に諸地方が充されてゐるか、仕上げられてゐるか、を致ふるものである。即ち地球表面に於ける物の地方的分布の學問が地理學である。斯くて彼にあつては、地理學の對象は物の地方的分布である。考へられるが、地理學はまた職能上、地方によつて相同じからざる諸事情が、人に對し、人の生活に對して如何なる影響を與へるかを明らかにせねばならぬとの考が彼にはある。従つて彼が謂ふ所の物の地方的分布の學問とは、地表を對象としてこれを chorologisch に即ち夫々の地方が獨自の姿相を有することを示さうとする現代の地理學と、その傾向に於て同一なりと言ひ得る。但だ、

只今言へる如く、彼れの地理學に所謂人文地理學的もしくは歴史的色彩の強いことは否み得ず、この點に於て彼はそののち自然地理學を自己の體系のうちへ多く採り入れたペシエルと對照される。

(茲にリツテルの傾向を表はせる辭句の一例として、彼れの名著の標題を記しておくのも無用ではあるまい、曰く、

Die Erdkunde im Verhältnis zu Natur und Geschichte des Menschen oder allgemeine und vergleichende Erdkunde als sichere Grundlage des Studiums und Unterrichts in physikalischen und historischen Wissenschaften. この標

題にいふ地理學^{*}は自然だけでなく人の歴史も重視されねばならないのであり、またその地理學は、物理學的諸學のみならず歴史的諸學の研究教授に確乎たる基礎を與へるものである。)それ故、リツテルと。ペシエルとを地理學の二大潮流―歴史派

と自然派との代表者として並ぶこと、恰かもリツテルとフンボルトに於けるが如くするのも、理由のないことではないが、而も兩者は或は、人と地との關係の攻究だけを、或は所謂自然地理學特に地形學のみを以て、直ちに地理學そのものと考えたのではない。^{*}故に例へば、地球全體についての一つの物理學ともいふべきものが即ち地理學であるといふやうな傾向(ゲルラント)は採り得なかつたのであらう。

* エルドクンデなる語はゲオグラフィヤなる外國語を獨逸語化したものである。既にゲオグラフィイといふ言葉があるのに更にエルドクンデなる語を用ひるのは術語の混雜を招く所以であるとの議論もあつて、近頃は多く用ひられないやうである。この『エルドクンデ』を用ひるについては、恐らく若干の國粹主義が働いたこと、想像される。但し此を『地學』として廣義に解する用語例が確立すればそれは、それでまた便利な言葉だと思はれる。茲にはさにかく地理學を譯しておいた。リツテルのこの著書の内容が地誌であることは、今更申すまでもない。

^{**} リツテルが地と人との關係を論ずるにしても、それは地表の一片について議論を立てるのであるから、地形その他の地表

形成の要素を全く除外することは出来ない。事實この方面の知識にも彼は豊富であつた。ヘンメルが人文地理的考究を度外視しなかつたことはその諸論文に明らかであるし、また彼が歴史の考察に鋭敏であつたことは、何よりも彼れの *Geographische Erkundung* が雄辯に證明してゐる。

リヒトホーフエンによれば、地理學は地球表面の學で *chorologisch* な性質を有してゐる。ヘルマン・フグネルは、地理學が人類の住地としての地球をも取扱ふべきものとし、そのためには自然科学的方法だけでは不十分であるとして、地理學に歴史の傾向が内在することを認める。人の機能は複雑高等な發達を遂げてゐるため、他の動植物のやうに無條件で自然に支配されはしない、換言すれば地理學が人事現象を取扱ふとき、自然科学的方法だけでは仕事が出来ないといふのである。斯くて彼れの所謂 *Historische Geographie* は、歴史と自然科学とを結ぶ紐帯であり、自然地理學はその基礎となる。(さればこの場合の *„Historisch“* は

先に示した歴史地理學の『歴史』よりは更に廣義に解釋さるべきであらう。歴史科學といふが如き場合の『歴史』と略々同義と考へてよからうか。)彼自身の言葉を以てすれば、『自然地理學は、人事現象の場所的序列がよつて以て條件づけらるゝところの諸原因を確めようとする』ものである。

五

然るに、地理學が取扱ふべき地表の構成分子なり状態なりは決して單純でない。之に應じて地理學の出發點、又は個々の場合の研究の重心が常に同一ではあり得ない。例へば、地表は無機物のみならず、様々の生物の存在する所である、而してこれらの生物は、その量の微小なるに拘らずフグネルの地理學教本第二六〇節を見よ—人の生活にとつて甚だ重要な役割を演ずる。人類そのものが既に地表に『結縛されて』ゐる生物の一つでもある。廣く地表を對象とする以上、地理學はこれら有機

無機兩界の何れをも捨て、はならない。従つて個々の研究が一方に傾くことも生じて来る。素材が多く、人の能力にも限度があるとすれば、斯る一方への傾きが生ずることは、やがてまた分業の利益を伴ふわけである。

斯くて地表を構成する右兩界の何れを對象とするかによつて、自然地理學^{*}と生物地理學との二つの研究領域が生ずる。前者は更に特に陸地を取扱ふものと海洋について攻究するものとに分ち得る。氣圈について論ずる學問も勿論存立する。

* 自然地理學と同様又は類似の内容をもち、従つて紛れ易い名を有する學問が二三ある。それらものを一々解釋することを差控へるが、只た列記だけはおかう。physical geography, physiography, physiogeographic, physische G., physikalische G., natürliche G. これらのもの、うちには比較的確然たる區別を立て得るものもあり、その甚だ困難なるもあり、學者によつては右のうち或る名稱を混用しつゝ、同義としてゐる例もある。

此等諸ろの研究領域は、何れも地理學と密接な關係を有する。茲に暫らく補助學の問題に入る。

例へば、地球を一つの天體として研究する天文學

地球の物理的性質を究めんとする地球物理學などが地理學に對して保つところの關係は、勿論無いとは決して言ひ得ないが、併し結局第二次的である。地表を對象とする研究領域は、之に比すれば

何れも地理學と甚だ親近の關係に立つ。地表を對象とするといふ點だけを見て、研究の職能、方法を顧みないならば、これらの研究領域はすべて地理學に屬する。實に、素材未だ大に備はらず、特別の研究方法とてもなかつた時には、海洋學もなく氣象學も存せず、況んや氣候學の如きはその影だになかつた。廣い知識の集團の中へ何れも編入されてゐたのである。併しながら今日にあつては、

氣圈の學は地理學ではない。其處に起る現象は氣象學、氣候學、地球物理學などが直接に攻究する。地理學はこれらの學の獲た知識を必要とすること誠に屢々である。而もその故に氣象學その他が地

地理學の一部に歸しはしない。地理學徒が氣象學に通ずること、少くともその一斑を心得てゐることは、必要でもあり且つ確に大きな利益でもある、けれども氣象學は地理學とは異なる獨自の體系を有する獨立の學である。地理學と氣象學との斯くの如き關係は、同時に他の親近なる諸學と地理學との關係を示すものである。地理學に近くして而も地理學には非ざる此等諸學は、即ち地理學の鄰接科學或は補助學である。

地理學の補助學にも種々あつて、もとより重要な程度を同じうしない。比較的古くから地理學とは別箇のものとして考へられ來つたのもあれば、今日まだ、少くとも一部學者によつて地理學の一部分なりと論せられてゐるものもある。而して補助學が所謂社會科學と自然科學との兩群の何れのうちにもあることは、また地理學の特徴なりと言ひ得よう。今主なものを列記してみるならば、數學

物理學、化學、鑛物學、岩石學、古生物學、植物學、動物學、人類學、人種學、土俗學、(土俗誌)考古學、歴史、社會學、經濟學などを數へ得よう。その外、前記の氣象學、海洋學、或は天文學、地球物理學もしくは測地學、地圖學、地質學、地形學などは、地理學が直接その素材を採ることの多い研究領域であつて、時として『一般地理學』そのものゝ内容を成す。此等の補助學が、何れも同じ程度に地理學のため補助知識を供するのではないと同じく、一々の補助學に於ても、必ずしも常にその全體が役立つのではない。例へば深遠な高等數學の知識は、有るに優つたことはないが、まづ必要は少ない。物理學では特に實驗物理學の教ふる所が重要であるし、動植物學に於ては特にその地理的分布について説く部分に注意すべきである。地理學として注意すべき他の學の斯る研究領域は、同時に地理學の側からこれが研究に従つて益

多きものなる場合が少くない。併し斯様な際には地理學とその學と夫々の方法、職能上の相違によく留意せねばならぬこと勿論である。之については前段にも述ぶるところがあつた。

地理學が此等諸學によつて益せられるといふことは、此等の諸學が地理學によつて便益を受けるといふことの他面觀である。只今擧げた例を再び採つて言はゞ、植物學や動物學が、夫々の種類の動植物の分布を論じようとするならば、一々の地方が如何なる性質を有するか、換言すれば、世界には如何なる地表が如何様に分布してゐるかを知らねばならないが、このためには自づから地理學の知識を借ることにもなる。斯く地理學と補助學との關係は一面的でなく双務的であるが、その双務は地理學の側から見ても補助學の側から言つても、常に輕重なしとは言へない。併し之は

夫々の學との關係について一々之を確めねばならないのであつて、一般的に斷言出來ることではない。

或る學の本體とその補助學との限界を決定するのは、必ずしも容易でない。地理學に於ては、その發達の上から見ても、また相互の關係の程度から言つても、右の限界を定めることは相當に困難である。例へば、只だ對象とするところが異なるといふ點からだけで區別出來るものでもなく、また地理學とその補助諸學との限界は斯くの如しと一括して論じ去ることも出來ない。そこで次には主として地理學の職能、方法について卑見を述べやがてまた地理學本部と補助學との限界如何、もしくは地理學がその本質上常に失ふべからざる部分は何なるやの考察に及ぶべきである。

六

地理學の職能については、既述のところでも自

然説き及んだことであるが、これを極めて素材に言ふならば、この生ける畫圖である地表を描き出す、或は再現することが即ちそれに外ならない。

或る一片の地表面、具體的に言へば甲又は乙なる地方(の地表面)が、如何なる事象によつて成り立つてゐるかを研究しこの研究によつて獲られた材料を以てその一片の地表面をいはゞ再び組立てる、之が地理學機能の第一階段である。この階段に於ては地理學即ち一々の地方の地誌であつて、或る地方の多様な地表面現象―地表面を構成してゐる現象の意―が複合して一つの『地理的個體』を成し、個體として本質的な事象を有することを明らかにせねばならぬ。斯る職能を果すに當つて、その方法の周到にして精密なることが、やがて正確な地誌を作り上げる必須條件の一たるは言ふまでもない。然るに個體としては大小種々のものを想定し得る。その最も大なるは勿論全世界である。世界は様々

の觀點から種々に區分され得るもので、例へば氣候帯による區分の如きはその一つである。今觀點を適當に定め(必ずしも單一なるを要せず、寧ろ適宜多數の觀點を選ぶを可とする)、これによつて世界を幾つかの部分に分つと、夫々の部分は當然他の部分と趣を異にした個體となる。併しその部分はそれだけで存在してゐるのではなく、世界全體の一部として、他の諸部分と並存してゐる。然らば當にその部分だけを斯く在りと記述し、且つこの故に斯く在りと説明するに止まらず、進んで世界といふ一つの大きな地理的個體についても記述説明せねばならぬ。之が世界地誌又は一般地誌の職能であり、従つて地理學に課せらるゝ第二段の職能である。

斯くて小なる地理的個體(地域、地理區)が大なる個體の一部を成し、その大なる個體が集まつて更に一層大なる個體を構成する、之に應じて地理

學は何れの個體をも無視すべきでない。地表全體について地理學が成り立つ。それ故、地理學の個々の研究に於ても、世界全體の綜合的地誌が斯學の最終目標たるに心し、常にこの目標を見失はないやうにせねばならない。

一般地理學、特殊地理學といふ用語例は、相當長く慣用されてゐるものであるが、元來此等の言葉は『地理學』を如何に解するかによつて自づから意義を等しくしないであらう。一般地理學或は一般地學（ドイツ語のエルドクンデを地學と譯すとして）なる名の下に、地球に關する多くの知識が網羅されたる學問を想定することはその一つの解釋である。併しながら今日に於ては、斯る一般地理學といふが如き、對象多岐に互り職能亦た極めて廣汎なる一つの學を想定することは困難である。それらの知識は渾然たる一體を成さずして、全體として互に異質的なる多くの群を成す部分を作つ

てゐる。それらの部分が相互に關係を有するといへ、これを集成するだけでは、其處に一つの體系が在るとは做し得ない。斯く集成されたものは學科ではあつても學ではない。

右の意義に於ける一般地理學は、本來地を描く職能を有する地理學の本體ではなくして、その補助學の集まりである。従つて右に謂ふ所の一般地（理）學は、本來の地理學が仕事する際に必要な素材を給するものであるから、地理學徒の先づ以て心得おくべき知識の範圍を大體指し示すわけである。故に、只今述べたやうな廣義の一般地（理）學を内容とするところの學科があることは、本來地理學にとつて有用且つ必要である。これ前者が後者のプロペドイテイクとして考へらるゝ所以である。而も前言せる如く、このプロペドイテイクは數箇の學によつて與へらるゝを適當便宜とするまでに、關係知識の領域が擴められ來つたこと

に注意すべきである。さればたとひ一般地(理)學なる名稱を、他に適稱なしとの理由から依然用ふるにしても、これを學科といふ意味ならばとにかく、一つの學問の名として取扱ふは困難である。

次に地理學の本體が地誌であるとした場合、『一般地理學』は如何なる意味を有するか。この場合には、一般地理學は即ち世界地誌である。諸多の地域複合によつて如何に世界が構成されてゐるかを示すものがそれである。茲に世界といへば、海洋を含むことは勿論であるが、元來陸地と海洋とは種々の點で性質を同じうせず、學問上夫々の取扱はれる領域も異なるを便とする、そのため海洋の取扱を全然地理學から離してしまふのではないが、地理學は先づ第一に陸地の學である。例へばドイツ語にいふ Landeskunde, Länderkunde は、陸地の學としての『地誌』と解せられる。湖の如きはそれが周圍陸地との間に有する關係が遙かに密接

であるから、換言すれば海洋の如くに獨立の個體として認められる程度が著しくないから、尙ほ地誌としての地理學に於て取扱はれる。尤もその取扱に必要な素材は、湖沼學の進歩につれて益々多くそれから採られることであらう。とまれ世界各地域の特性を描き、而も夫々に特異なる諸地域が集まつてその間に脈々たる關聯を保つことを明らかにするのが一般地理學の職能或は志向である。

斯る一般地理學に對應する特殊地理學は、當然各個地域(その大小は場合によつて同じくないが)の地表を對象とし、これを記述説明するものなればならぬ。一般特殊の別は素材を集むべき範圍の廣狹を意味するが、地理學としての本質に於ては毫も異なるところがない。

廣く地球に關する多くの知識を包含する『一般地(理)學』に對應する特殊地理學は、前者によつて與へられる法則的説明を利用する地誌とも解せ

られるし、また現象種類シユベグイによりその一々の分布その他を説くものとも考へ得る。地誌と解するならば、この『特殊地理學』こそ即ち地理學の本體であるし、後ちのやうに考へるならば、そのシュベツイエレ・ゲオグラフィは地理學を周つてこれと密邇の位置にある諸ろの補助學か、或は地理學そのもの、領域に屬すべき特殊の研究である。此等特殊の研究が進めらるゝことの有益なるは既に述べた。何れにしても、地誌としての地理學を立つるに、諸種の『地理學』をその身邊に彷徨せしむる要なきは明らかである。

七

更に、地理學が法則を立つる學であるか否か、或は少くとも法則を探求してこれを確知するに努むべきものか否か、地理學の職能について論ずる際、此等の點が問題となること少くない。

地理學が取扱ふ地表のうち、人類の環境を成す

ところの自然が、一定の法則によつて説明し得られることは尤も了解し易い。例へば何故に此の性質を有する山脈が此處にあり、かの體様を呈せる植物被が彼處にあるかは、それらの現象に關して幾多の經驗が積まれ且つ剖判されるならば、夫々法則から説明し得られるやうになる。即ちそれらの自然現象については、自然科學の所謂普遍妥當なる法則があてはまるわけである。然らば人類そのもの及びその文化所産にして地表を構成する部分として現はるゝものに關しては如何であるか、茲では問題は前の場合よりも困難であるやうに思はれる。それは人の心意の活動が多少とも自由であると考へることから起る。

自然科學が對象とする自然現象に於ては、この生成發展は前述の如く必然の法則によつて説明される、AあればBあり、その間の關係は時處を問はず必然である。即ち茲には儼然たる因果律が存

在してゐる。人の活動、その文化所産を説明する法則としては、斯くの如く必至的内容を有するものはない。もし法則があるとしても、それは蓋然的内容をもつものである。例へば人の活動を社會的事象として時によつて序列し説明する歴史を見るに、その與ふるところの法則は、AあればBあること確らしといふ程度のものである。歴史は繰返すといふ言葉があるが、その意味は、先行事象に於けると大體同様な要因が大體同様の事象を生じ發展せしめるといふのであつて、決して細部まで同じ徑路をとる事象が度々起るといふのではない。

地理學が或る地域について攻究する際、これに助力するものとしては様々の補助學が教ふる諸種の『法則』があるが、それらの『法則』のうちには茲に述べたやうに蓋然性の存在を指示するものもあることに注意せねばならぬ。殊に人文地理的研究

の方面にあつては、一定の法則によつて、自然が人にはたらきかけるその作用の性質や程度を演繹するに困難なことが多い。例へば、聚落は一つの地表構成の現象として地理學の考察すべきものであるが、それが地理的環境即ち自然條件の總和だから、法則的に説明し盡されるかといふに、恐らくは然らず、その聚落を生成し發展せしめる他の要因即ち人の側に於ける諸事情をも顧慮せねばならないであらう。この際唯物的に、人の一切の活動、人間社會の歴史はすべて自然と人との關係の發展につれて動く、人も自然の一部、自然そのものであつて、自然の服すると同じ法則に服すると考へれば、斯る二元的の考へ方を必要としないことにならう。現在の狀況では、地人複合のこの地表現象について、地理學が果して斯く簡明な説明法則を立つる職能をとり得るか否かに關し未だ疑を殘さざるを得ない。例へば素材の不足を意と

せず、地理學をして法則を立つる學たらしめようと努力するならば、それは寧ろ幼弱な地理學を苦しむるところの『小兒病』となり易いであらう。

この點からも、地理學の職能を完全に果すためには、個々の事象種類或は小地域についての研究が先づ行はれ、それが能ふ限り充分に遂行されるべきことが必要である。斯る種類の研究によつて、その範圍の廣狹はとにかくとして、地表現象が記述され且つ説明されるのであるから、次第に或る範圍の現象の把握が容易となり、それが進んで地表全體に及ぶべきことを期し得よう。また最初から説明を施すことが困難な場合でも、先づ記述の正確適當なるべき要求は當然存するから、この要求に副ふべく努力するうちに、問題としつゝある事象の性質やその他の事象との關聯が次第に闡明せられる。記述といひ説明と言ひ全然別物ではなく記述が發達すれば説明の域に達するものだからで

ある。斯くして自然、人文の諸現象が共存關聯して諸ろの地域なり世界なりの地表を形づくることについての法則を地理學は見出さんとすると考へるならば、この點で地理學はノモターテイシユであり、先づ一々の事象の記述をなす點から言へばイデオオグラフィシユである。この事情からも、地理學は二元的態度を有すと説かれる。併しながら、地理學が法則を立てると言つても、社會（進化）の地理的決定論を説くが如きは、地理學本體の仕事ではない、これに本づいてはゐるが而も直接この本體に屬するとは做し難い。同様に、地理學は地表現象の記述を行ふとは言つても、山川社寺を紹介案内したゞけで直ちにそれが地理學であるとは考へ難い。

八

上來述べ來つたところで、地理學のとる方法にも自づから説き及んだが、尙ほ數言を附け加へた

い。

方法といふときは、これを二様に解釋し得る。

一は個々の研究方法が出發して來るところの指導の原理といふ意味であり、他は夫々の手段を用ふる具體的な一々の方法を指すと解される。茲に方法は必ずし何等かの手段によつて行はれるものであるから、兩者の關係は誠に密接である。併し方法と手段とが即ち同一物とはならない。

元來職能と方法とは表裏の關係にあるもので、例へば繪や地圖とその裏うちとに譬へられよう。

地圖を良く保存するためには裏うちせねばならぬやうに、職能を果すためには一定の原理的方法を必要とする。如何なる技術を用ひて裏うちするか材料には紙を使ふか布を用ひるか、糊には何がよいか、此等の事柄は恰かも、職能を果すに如何なる具體的方法があるか、如何なる手段を以てするかなどの事項に相似てゐる。斯くて地理學方法の

原理は、地表を記述説明するに最も適切な方法手段を採れといふに歸着する。

常に地理學のみならず他の知識領域にあつても一定の現象を記述説明しようとする際、原則的に必要な方法は觀察とその結果の處理とである。先づ對象たる現象を觀察し、これによつて獲た結果を更に種々の方法、手段によつて適當に處理せねばならぬ。この二つの階段は必ずし經べきもので觀察だけでは地理學は成立しないし、また觀察がなくて素材の蒐められるわけもない。故に先づこの兩者について見るべきである。

觀察は己れの關係ある研究領域に於ける仕事の素材を蒐集する方法であるから、第一に自身これに従事する。この場合人の感覺だけによつては充分精密な結果を期待し難いことも少なからず、また一個人の能力にも限りがあるから、種々の機械や既成の資料を利用するのが寧ろ普通である。蓋

し斯る補助手段を用ふるによつて觀察は正確詳細となる。勿論斯る場合に、資料の剖判などの必要なるは例へば歴史に於けると異なるらない、即ち或る資料が己れの研究の目的に叶ふか、且つ如何なる程度まで信頼され得るかその價值を決定せねば次に觀察事項を整理する際、價值の異なる知識が混淆し、適正な研究を遂げ得ないことにもなる。

尙ほ觀察を行ふに當つては、常に言語を以て一々の事項を記録してゆくだけでなく、地表を如實に描き出すといふ要求に應ずるためには、圖書特に地圖、見取圖、寫真などの直觀的手段に頼ることが有効である。同様に既存の資料を探求する時にも、此種圖書類には特に注意を拂ふが利益である、これによつて己れの觀察を補ひ或は訂し得ることが甚だ多いと共に、圖書類で示すのでなければ眞にこれを描き得たといふことの出来ない觀察事項も少なくないであらう。

觀察(資料蒐集などをすべて含む)によつて獲られた素材の處理は、これを更に數段に分つて考へることとする。

素材が充分な程度に集められたならば先づ秩序ある數へ上げが試みられる。之によつて夫々の素材が、目論まれてゐる知識系列のうちの何處へ入り込むか定まる。また同時に、此等素材によつて構成されるその知識系列の部分が互に撞着しないやうな全體の組織が考案される。即ち各部分は互に離るべからざる關係を保ちながら、その系列全體を完成する。従つて只だ或る地方の地表現象を記述するだけでも、それを満足すべき程度に仕上げることは必ずしも容易でない。記述者側に於ける諸事情、例へば能力、時間の不足などを問題外としても、尙ほ資料の不十分な場合などは相當に多かるべく、この際その資料不十分な事項について強いて記述を行ふには、多くの注意を必要と

しやう。素材たる知識を並べたゞけでは記述にさ

へならない。並べた隙間にはセメントを填めねばならぬ。單に地理學だけでなく、あらゆる事項の記述、文藝作品に於ける着想の配列に於ても必須なるこのセメントは、フアンタジイと呼ばれる能力の所産である。フアンタジイとは言ふまでもなく想像の作用であつて、己れ経験せざることを經驗する能力に外ならない。この能力が大なる人々の作品は、それが學術上のものにしても藝術上のものにしても、獨創的なりと稱せられる。地理學に於ても資料不充分なる箇所は、フアンタジイによつて生ぜしめたセメントを以て填充する―問題の現象を再演せしめる―ことになる。この能力はもとより天賦のものではあるが、後天的にも發達するから、―記述が客觀的なるべき條件を充しつゝ、且つせめて必要なだけの『セメント』を用意する位のことば、恐らく一般的に要求されて不可なきと

ころであらう。

地理學は場所の學であるから、或は地表現象が絶對的（地球上）相對的（例へば或る地域のうちにて）に如何なる位置にあるかを先づ決定せねばならぬ。そのためには測地學が與ふる所の資料により、又はその教ふる所によつて、絶對的位置を定める。次に相對的位置を見る。同様に地理學が場所の學であることから、問題としてゐる現象を前述のやうに直觀的に表現する方法のあることが考へられる。蓋し場所に關する記述は直觀的に示し易いものだからであつて、その手形として地圖見取圖その他寫眞、繪畫が用ひられるわけである。斯く位置の決定が重要であるから、研究に於ては多少とも位置に關する記述なり説明なりが必要で殊に測量の未だ行はれず、或は充分ならぬ地方に關する報告などでは、それが地理學的報告なるべき限り、なるべく多數の地點の位置を確定し、又

は探検路に沿うたルウテンアップナーメを爲さねばならぬ。勿論寫眞、見取圖などは、地圖と併用されても(目的が異なるから)貴重な素材となる。

此等の手段を用ひる仕事を省略しては、結果に於て所謂籠を畫いて睛を點せざるの憾を深からしめることゝもなるであらう。とにかく以上の如くにして觀察事項は先づその位置に關して明確に記述(説明)される。

次に地理學的立場から見て、夫々の地方の地表についての素材が適當に選擇されねばならない。その適當といふ標準は夫々の場合の研究者により或は研究の對象になつてゐる地方により、同一ではあり得ない。要するに一、二の現象によつて、その現象の屬するカテゴリ全部を代表させ得るやうな選び方が、方法として上乘である。何故斯る素材の選擇をするかと言へば、複雑な地表現象の複合を細部まで何物をも洩らさず書き上げ盡き

悉すことは非常な困難なことでもあり、實際にその困難に報いるだけの効果も舉りにくいからである。斯く選擇された事項が記述されることになるのであるから、結局記述さへ既に一種の概念化、法則化に外ならない。而して良き選擇が良き記述を生じ易からしめ、また良き記述が適切な説明を施し易からしめることは言をまたない。

選擇された素材が夫々の地方の、且つ己れの屬する現象種類の特性を最も明らかに示し得るものなりとし、さてこれを記述せねばならぬ。そのためには記述の用語、論理が嚴に地理學的なるを必要とする。一定の約束ある術語を理解して用ひるのでなければ、地理學の要求する記述とはならない。例へば一定のターミノロジーに従はぬ地理的記述があるとする、その場合、その記述が如何に文藝的には高級なものであつても、用語が正確で(或は地理學的關心を有し)ない以上は、直ちにこれ

を以て地理學的記述の範とすることは出来ない。更に説明を加ふるに當つては、地理學的教養を必要とする程度一層大であるから、好事家が編んだ地誌がそのまま地理學的なりと做し得ない場合も多いのである。併し斯く言へばとて、藝術作品として優れたもの、例へば日記、紀行、風景論、風景畫などが少しも地理學の資料とならぬとするのでもなく、また地理學の記述が藝術的であつてはならぬと言ふのでもない。正にその反對である。記述が藝術的であることは、現象を如實に再現せしめる所以であるから最も歓迎すべく、従つて斯る努力は—自から存するものでもあるが—決して惜むべきものではない。實際に於ても、地理學として優れてゐる研究は、その表現に於ても清新澗澗たる美をそなへてゐることが多い。只だこの點だけを目的とすることが許されないのに注意すべきである。

既に屢述せる如く、記述も亦た説明であるが、而も特に説明といふときは、記述が一層發達して最早記述と稱すること適當ならぬ程度に到れるものを指す。即ち術語の如きも、その生ずるまでには一定の概念化の過程を履んでゐるから、術語はそれ自身法則の如きものではあるが、併し普通に説明と言へば、術語を多數用ひて地表現象を記載するだけのことを指さず、術語を用ひるのは當然であるがその上地理學的法則に頼つて一連の現象の關聯の有無多少を解明することを意味する。それ故、或る地方について地表現象複合を記述しやうとするには、自然説明を必要とすることになる何となれば、斯くの如き複合ありと記すためにはこの複合を構成する現象が、その種類に應じて複合の何れの部分を如何様に充すものであるか、先づ知らねばならず、之を知るためには多くの現象種類がその地方で相互に如何なる關聯をなして

ゐるか、解明されねばならないからである。

この解明のために地理學的法則に頼るといふことを述べたが、地理學の取扱ふべき地表現象は、氣候、地形、聚落、交通路など自然、人文の現象の一つではなく、それら現象すべての複合であるこの複合が何故に恰かも其處にあるかを説明するのが地理學である。その説明に於て頼らるゝ幾つかの解明過程を型式別に纏め、簡單に言ひ表はしたものの、これが法則であると言へる。併し之は實は甚だ精密な言ひ方ではない。即ち氣候や地形のやうな自然現象については、法則化の可能なることを疑ふべき餘地はないが、所謂社會(歴史)現象従つてまた自然と人生との關係の如きについては立場によつて法則化は不可能であつて、強いて言へば個々の現象、その關聯の一々の場合、これ即ち法則なりとする外ない。或は、この後ちの立場をとるならば、人文現象の部分に關しては、精

々既述の『蓋然の法則』を立て、これに頼るを以て満足するの外ない。且つまた實際斯る蓋然律さへ成り立たぬとすれば、我等は昨日を信じ得ず、明日を恃み得ない。換言すれば、斯る蓋然の法則を出すところの假説は、すべての人が、全體として同様の事情に對しては同様に意識し反應するといふにある。然らば如何なる立場が正しいか。この問題は困難であつて、只今之を論斷し得るだけの準備も時間もないが、只だ立場の可能と妥當とは分ち考ふべきであると思はれる。例へば、夫々の地方の地表は、すべて夫々の地方の住民の生活をして斯く々々ならしめんがために存在するといふ目的論的立場をとることは可能である。併しその立場が果して妥當なるか否かは更に問題として殘る。

差當り立場の問題を個人の解釋に委すとして、法則と個々の研究との關係を今少し見ることにし

たい。地理學の概念なり法則なりは、決してそれらの系統ある集團を求めざる只だ一つの研究によつて構成されたものではなく、また個々の現象の研究される以前に、夙くから作られてゐたものでもない。左様な職能を帯びた學問が同様に早くから存在してゐたわけでもない。寧ろ大體同様の目標を設けて進む研究の多數が、意識的又は無意識的に協力し、之によつて同種現象の各地に存在することや、其等の現象の發生發展する形式が地方により特性あること、或は同一、もしくは類似せることなどが知られる。此等の現象の體様と他の現象との關係を次第に追究すれば、遂に一定の現象と他の一定の現象との間に、因果又は條件としての關聯が存することが明らかになる。茲に法則又は説明の頼りどころが與へられる。

説明の頼りどころとしては、定量的に言ひ表はされた法則が最も決定的である。従つて法則が定

量的に言ひ表はされるやうに努力することは、一つの意義ある仕事に相違ない、地理學關係の方面で見れば、氣象學の如き、地形學の如き、此の傾向あるものである。斯る法則は、統計方法の教ふる所に従ひ、甲現象と乙現象との相關が數量的に決定さるゝに至つて完成する。但し常に忘れてならないのは、このやうな法則を立てることそのことが、直ちに地理學の仕事ではない點である。また繰返し説くやうではあるが、人文現象に關係する研究領域では、廣く右の如き簡單なる因果律を立て得るか否か、(寧ろ或る範圍の現象の集團のうちで、個々の現象が全體に對して如何なる價値を有するか、即ち如何なる地位に在るかだけを定めるのではないか否か)之については各人の立場から何れとも答が發せらるべきである。地理學としては、地表現象の多數が恰かも其處に複合して一つの地理的個體を成してゐる點に考察の主力を

向くべきで、それが要するに地理學の仕事である。従つて仕事の方法としては、自然、人文何れの種類に入るべき現象にもせよ、共に仔細にその生成發展の跡を觀察し、その結果を上述の如き意味で地理學的に記述し、同じく自己の創案により或は補助諸學の助けによつて其等現象の説明をなし、結局右の考察の目的を達するに努めればよい。この努力が實現されるうちに、地表現象の共存複合が解明される法則も見出されよう、見出されたならば、それこそ眞の地理學の法則であつて、地理學の借用してゐるといふ意味の『地理學』の法則ではない。現在この意味に於ける眞の地理學の法則が、高々甚だ少いからとて、それによつて地理學の存在が否認されるわけではない。却つてこれが進歩の促さるべき緣由となるべきであらう。

地理的個體或は複合なる概念は、具體的には様々の大小、形式の景觀(風景、風土)によつて示さ

れる。されば地理學は或る意味で景觀の學である。

この場合、景觀には自然のそののみならず、人文景觀をも含む。また、同様の個體又は複合の幾つか集まつた一層廣大な地帯を想定することが出来る、斯る大地帯或は小さい個體(複合)でも、屢々地域、地理區として取扱はれる。たやすく想像され得るやうに、景觀帶、地域などの境界は、必ずしも明確ではあり得ない、(一つの地域を構成する地表現象の種類が多いことからだけでも推察されるやうに)。けれども斯く地表複合の有する特性に着眼し、この特性によつて數箇の地域群を設けることは、研究の進行上確かに有用な研究である。且つそれは恰かも地理學の本質的部分に於ける事に屬する。地域區分の標準たるべき現象種類としては何を採るべきかといふが如き問題は、既に從來とても様々に論せられたが、將來と雖も、愈々擴まれる地理學の視界から屢々この問題が檢分

せられることであらう。そして一般地理學汎論は實にこの邊に最もたやすく確立されさうである。

もし夫れ方法なる語を論理學的に考へるならば歸納及び演繹の方法が用ひられる。同種現象に通ずる不可缺の要素が何であるか、且つその要素がその現象に對して如何なる關係を有するかを知るためにしても、先づ多くの同種現象を比較し、よつて獲られた諸事實のうちから特定の要素なり關係なりを抜き出す、即ち歸納する。故に比較が意識して行はれない間は、例へば右の如き問題もこれを充分に解くことが出来ないばかりか、やゝもすれば過誤に陥る虞がある。比較、歸納を行ふ際先に言へるファンタジイ或は事物を *eidichten* する能力が著しい助けとなるが、この能力は常に觀察事項の質と量とを顧慮する必要がある。更に斯くして行はれた歸納が正しいか否かは、演繹によつて證示されやう。個々の現象について、既存の

同種現象についての概念化、型式化、普遍化が成立しないならば、その普遍化は訂されぬばならぬ。斯くの如くにして、(他の學と同様に)地理學は進歩するのである。

尙ほ地理學特にその人文現象を取扱ふ際の地理學の方法、職能、或はその『現象』の意義などに關しては未だ、述ぶべき卑見がないではないが、さまでとは思ひつゝ、茲には右の概説に止める。最後に、この管見を綴るについて種々の教示と示唆とを受けた論文の著者、この文の初めに舉げた方々の外、ラツツェル、ヘットネル、H・ワグネル、ブリュウス、バサルグ、フライリフゾン、ギュンテール、シユナス、マウル、ブラウン、シユリユーター、ハウス、サウアー等の諸先進に敬意を表する。